

身近な人や自然とのつながりのなかで、幼児が命の大切さを感じ、自ら考えて行動するための援助を探る

<テーマについて>

コロナ禍の影響もあり、入園まで家族以外の人とのかかわりがほとんどなく、地域とのつながりや同年代の友達と一緒に遊ぶ経験が少ない幼児が多い。友達や異年齢児、地域の方など、身近な人とのつながりを深め、人の温かさや大切にされる喜びを感じて自分らしさをのびのびと発揮し、「自助」「共助」の基盤となる「自分も相手も大切にできる心」の育ちを支えたいと考えた。園内外の豊かな自然環境や広い園庭を生かして遊びの充実を図り、小さな命を大切に思う気持ち、災害にも負けない心と体の育成を目指すとともに、自ら考えて行動できるようになるために必要な教師の援助や環境の構成について探りたいと考え、研究テーマを設定した。

(1) 防災教育における育てたい幼児の姿を明確にし、遊びの充実を図る

下記の3つの視点から、幼児理解を深め、環境の構成や教師の援助について教職員間で協議し、共通理解して遊びの充実に取り組む。



「思いっきりジャンプ！」

防災教育で大切にしたいことと普通の保育で大切にしていることの共通点を探り、「育てたい幼児像」を明確にしよう！

元気で健康な心と体づくり



「オタマジャクシの赤ちゃん！かわいいなあ！」

小さな命と出会い、大切にできる心の育成

共通理解しよう！「育てたい幼児像」

- *いろいろなことに自分から挑戦する子供
- * 試したり、工夫したりして繰り返し遊ぶ子供
- * 好奇心や探求心をもってかかわる子供
- * 動植物の生長を素直に喜ぶことができる子供
- * 自分のことも友達のこと大好きな子供
- * 自分の思いを素直に表現する子供
- * 相手の気持ちを感じ、共感できる子供 など



「遊戯室はこっちだよ！気を付けてね」

様々な人との温かいつながりの構築

<実践内容・成果>

- ・左記の3つの視点から、幼児理解を深め、遊びの充実を支えるための教師の援助や環境の構成のあり方について教師間で継続的に協議し、共有することができた。
- ・幼児の課題や育てたい幼児像が明確になり、それらを意識した避難訓練の実施や保育の工夫や実践につなげることができた。

(2) 防災カリキュラムを見直し、改善する

「よく聴いて、分かって、自ら行動することができるようになりたい！」

- PDCA サイクルを意識した避難訓練の計画・実施
 - ・様々な災害や規模を想定した避難訓練を計画的に実施し、実際の幼児の姿から『ねらい』『内容』について反省・評価し、見直しを図る。
 - ・実際の避難訓練の様子を撮影し、幼児一人一人の育ちや課題を把握し、共通理解する。
 - ・事前、事後指導を充実させるとともに、園内研修を行い、援助のあり方を探る。
- 年間防災カリキュラムの見直しと改善

<実践内容・成果>

「地震の後に火事が来たらどうしたらいいかな？」

<様々な災害や規模を想定した避難訓練の実施>

- ・様々な災害や規模を想定した避難訓練を計画するにあたり、地震→火事、本震→余震などの避難訓練を取り入れた。
- ・様々な災害を想定することができ、教師の視野も広がった。



「防災スキップ♪音と声を聴こう！」

<様々な音を使った避難訓練の実施>

- ・緊急地震速報や火災報知器など、音に着目した避難訓練を充実させた。
- ・事前、事後指導や普通の保育の中でも「聴くこと」を大切にしていくことで、しっかり耳を傾け、理解して行動しようとする姿につながった。



<自分たちで考えて行動できるように>

- ・特に年長児は自分たちで考えて取り組んでいけるよう、事前、事後指導の内容を工夫した。園内（屋外、屋内）の安全な場所や危険な場所を自分たちで見つけてクラスで共有し、掲示したことで、避難訓練の際に自分たちで安全な場所に避難することができるようになった。



「防災リュックの中って何が入っているの？」
「おもちゃもあったらいいな」



「ここは倒れてきたら、危ないかも！」



「安全な場所には、ニコちゃんマークを貼ろう」



危険！ 安全！



「非常持ち出し袋には何を入れる？」
「なぜそれが必要？」

(3) 保護者・地域とともに防災に対する意識を高める

- アンケートの実施
- 「みんなで学ぼう！親子防災研修会」実施
講師：神戸学院大学 船木 伸江 教授
- 親子園外保育・防災体験学習「兵庫県広域防災センター」
- 「ぼうさいつうしん」を作成し、保護者や地域へ配付
- 地域の防災訓練に参加

みんなで学ぼう！親子防災研修会

④ ぼうさいつうしん：毎回作成し配付することで、保護者や地域への啓発となった。



<まとめ>

- ・園内研修を積み重ね、遊びの充実を図るなかで、防災教育において大切に育みたい幼児の姿と普通の保育のなかで大切にしている育ちとのつながりを再認識し、幼児理解を深め、防災教育の視点からも幼児の育ちを捉えることで幅広い視野で保育を組み立てていく手立てとなった。
- ・避難訓練の実施方法や内容について工夫し、その都度、幼児とともに振り返りの機会をもったことで幼児自身が課題意識をもって避難訓練に取り組み、自ら考えて行動する姿につながった。
- ・職員間で PDCA サイクルによる避難訓練の見直しや事前、事後指導の充実を図り、新たな課題に向けて取り組んだり、様々な災害を想定して話し合いを積み重ねたりしたことで、教師の指導力が向上するとともに、園全体の防災意識が高まった。教師自身が正しい防災の知識を身につけておくことの重要性を認識することができた。
- ・「親子防災研修会」「ぼうさいつうしんの発行」「防災マップの作成」などの取組を通して、保護者の防災意識が高まってきている。今後も引き続き、幼稚園、家庭、地域が一体となって防災教育について意識を高めていくことができるよう取組を工夫していきたい。



震災に学び、今を見つめる 防災学習



本校では、甚大な被害を受けた阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、震災経験を活かした防災教育が行われてきた。また、地域の方に震災経験を直接うかがったり、地域の方とともに防災学習を行ったりする機会を大切にしてきた。

しかし、震災から四半世紀以上過ぎ、子供たちにとっては、阪神・淡路大震災は、自分たちの生まれるずいぶん前のこととなっている。

そこで、これまで積み上げてきた防災学習を見つめ直し、今、そして、これからの子供たちと地域の実態に合った学びへと工夫を重ねることを意識して、実践を行った。

【本校の防災学習の目標】

- ・命の大切さ、生きることの意味、人間と自然、人と人とのつながり、人間としてのあり方や生き方を考える。
- ・防災訓練や震災についての学習等を通し、災害から自らの命を守るために必要なことはなにか考える。
- ・助け合いやボランティアの精神など「共生」の心を育む。



【今年度の力点】

目標達成に向けた各学年の学習のあり方や系統性を見直すとともに、地域と連携をしながら進める防災学習のあり方を、教育課程全体から見つめなおす。

全職員で取り組む

校内研修

- ・阪神・淡路大震災や東日本大震災、令和2年豪雨など、日本各地で起こる災害と、それを学習で取り上げることの大切さを全職員で考える

「しあわせ はこぼう」の活用

- ・防災副読本「しあわせ はこぼう」の教材を改めて見直し、学習時期と内容について、計画の改善を図る
- ・今年度の実践について、確実に記録に残して、引き継ぐ

カリキュラム・マネジメント

- ・今年度の実践や、地域との連携した学習等を、各学年や教科等の学習プランに整理し、学校全体の教育課程の視野からの改善を目指す



各学年のテーマと学習活動の一例

6年 「災害への備え」

防災グッズの紹介など
(身近なものを災害時に役立てる工夫)

5年 「地域と減災」

様々な災害について調べ、自分たちにできる減災について学ぶ ※防災学習運動会

4年 「地域と避難」

避難所の様子や地域のかかわり(防災福祉コミュニティ) ※防災資機材庫見学

3年 「地域と備え」

本二の地域の様子や人(消防団等) ※消防団の見学

2年 「家での備え」

避難リュックなど
(家や学校での備えについて考える)

1年 「命と備え」

避難の仕方、震災について

地域に学ぶ

防災学習運動会

- ・20年以上行われている本二の伝統的行事
- ・防災福祉コミュニティや消防署、警察署と共に実施。担架リレーや伝言ゲームなど、災害の際に役に立つ知識や技能について、楽しみながら学んだ
- ・保護者にも参観を呼びかけ、地域・保護者・学校の連携をより意識できるようにした



防災資機材庫見学

- ・防災福祉コミュニティによる資機材庫の説明と見学。防災への願い等も合わせてお話を伺う

消防団の見学

- ・社会科の消防の学習の発展的な学習として取り上げる

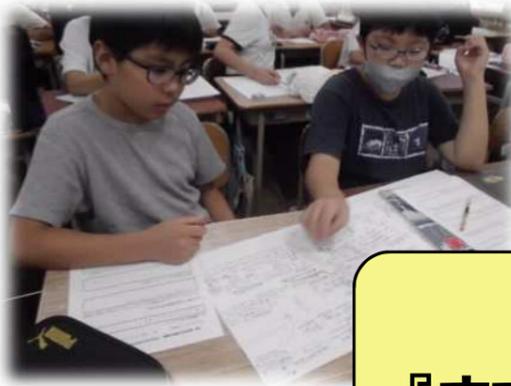
【成果と課題】

- 学校にとって、改めて、「命を守る防災教育」「命を見つめる防災教育」を目指し一体になって取り組んでいく機会になった
 - 地域との連携を見つめなおす機会になった
 - ・1年では十分に成果までつながっていない部分もある
- ↓
- ★ **未来～5年後・10年後～につなぐ防災教育**を目指して今後も地域と連携をしながら、工夫を重ねていく。





自分たちで命を守る 明親コミュニティへ



学校教育目標
『こころ豊かな子』



めざす子供＝『明親っ子』
『すすんで やさしく 最後まで』がんばる子



総合的な学習の時間
南海トラフ巨大地震に備えて…まず、改めて「災害」「防災」について自分が興味のあることについて探究的に調べた。調べたことをクラス発表会で共有した。学んだことを下級生に伝えるためにグループを作り、発表の内容や方法を考え、全校で防災プレゼンテーションを行った。

地域参加型防災訓練
南海トラフ巨大地震による津波の被害を想定し、垂直避難を行った。できるだけ地域の方々にも参加していただくことに意味があるのでは、という児童の意見を反映し、保育所の子供たちや防災福祉コミュニティ、地域の消防団、保護者の方々にも参加していただいた。

**明親小学校区の
防災ジュニアリーダーという存在に**

イオン・消防署合同防災学習
子供たちにとって身近であるイオンモール神戸南と兵庫消防署に協力していただき、モール内の防災の工夫や施設の作り、役割分担について教えていただいた。また、地震体験車「ゆれるん」に乗り震度6強の揺れを経験したり、VRによるシミュレーション訓練を行ったりした。

MCC 食品 避難食実習
阪神・淡路大震災を経験した、神戸市東灘区にあるエム・シー株式会社。震災当時の企業としての歩みや、これまでの取組、「準備」しておくことの大切さについて教えていただいた。実際にパッククッキングでお米を炊き、実践に生かせるノウハウを知ることができた。



自分で考え動こう ～命を守るため、いざという時どうするか～ 神戸市立高和小学校

本校の実態

- ・昨年度創立150周年を迎えた、歴史のある学校である
- ・校区には田んぼや畑がたくさんあり、自然が豊かである
- ・児童数は全校で30名と少人数であるが、全学年で様々な活動をしたり、隣接学年で学習や行事に取り組んだりすることで、協力しながら過ごしている
- ・地域は高齢化が進み、人口も減少傾向ではあるが、地域行事や寺社の催事などを通して強いつながりを感じる



実践のねらい

高和小学校区全体の防災力の向上

いざという時を想定し、大切な自分と周りの人の命を守るため、どうするのか考えて行動する力

取り組みの2本柱

- ① 楽しみながら防災につながる子供たちのスキルを高める
- ② 地域との連携の防災訓練をさらに発展させる



実践の内容

【1】楽しみながら、防災につながる子供たちのスキルを高めるために ⇒学校（児童・教職員）での取り組み

- 4月・9月の避難訓練「やらされている訓練」から「自分で考えて行動する訓練」へ
- 「防災すごろくゲーム ぐらぐらタウン」や「なまずの学校 紙芝居カードゲーム」、「避難リュック」などを活用した防災学習
- 「人と防災未来センター」へ校外学習に出かけ、阪神・淡路大震災や防災について学ぶ（4・5年生）
- 神戸市学校防災アドバイザー 長谷部 治 様を招いた職員研修
「今日的な防災学習の在り方や高和地域の特徴を生かした防災訓練の在り方について」
- 4年生「みんなで守ろう 故郷高和」（前20時間 社会・総合・国語）の学習
「高和ステキマップ(ハザードマップ)」作りを通して、自然災害から自分の身を守るとともに自分たちの住む地域を守ろうとする気持ちをもつ



【2】地域との連携の防災訓練を発展させるために ⇒1月13日（土）土曜参観・地域防災訓練（地域・保護者との協働）

- 消防団、高和防災コミュニティ、西消防署、神戸市危機管理室、市民防災総合センターの協力
- 全校生を8班に分け、保護者・地域の方や担当の教職員と一緒に15分ずつ各コーナーをローテーションして体験

- ①水消火器 ②放水訓練 ③外部給電 ④地震体験車「ゆれるん」 ⑤VR 災害疑似体験
- ⑥AED と心肺蘇生法練習 ⑦煙体験 ⑧ふっQ水栓 ⑨簡易パーテーション



成果と課題

- ・一人一人が地震、火災、水害など緊急事態に対応する体験できた
- ・本校が避難所となった際にどのようなものが利用できるのか、非常用の物資はどこに収納されているのかなどが分かった
- ・日常の避難訓練の大切さが分かった。毎年、地域とともに訓練することで高和地域の防災力を維持・向上させていきたい
- ・いざという時、大切な命を守るため、どうするのか考えて行動できる力を伸ばせるよう、実践を積み重ねていきたい

「いざ」という時に身を守る

神戸市立御影中学校

0. 御影中学校 教育目標

正しく 強く 朗らかに

1. 実践のねらい

本校は、令和8年度に創立80年を迎える。阪神・淡路大震災時には西校舎全壊、南校舎に被害を受けた。この実践に取り組んだ令和5年度は、阪神・淡路大震災から間もなく30年、また、今年に関東大震災から100年という節目の年でもあり、体験型の防災教育を主とし、「いざ」という時に自分で身を守れるよう、今年度の方針は実践的な学習を進めていくこととした。以前は地域との連携も行っていたが、それもすべて再構築する必要があり、これを機に新たな御影中学校の特色を活かした防災教育を実施していきたいと考えている。

2. 実践内容

クロスロード



正解はない。その時の最善を考える！

震災学習



いつ起こるかわからないこそ日常から備えを。

火災 DVD



怖いのは「火」よりも「煙」である。

救助・救急



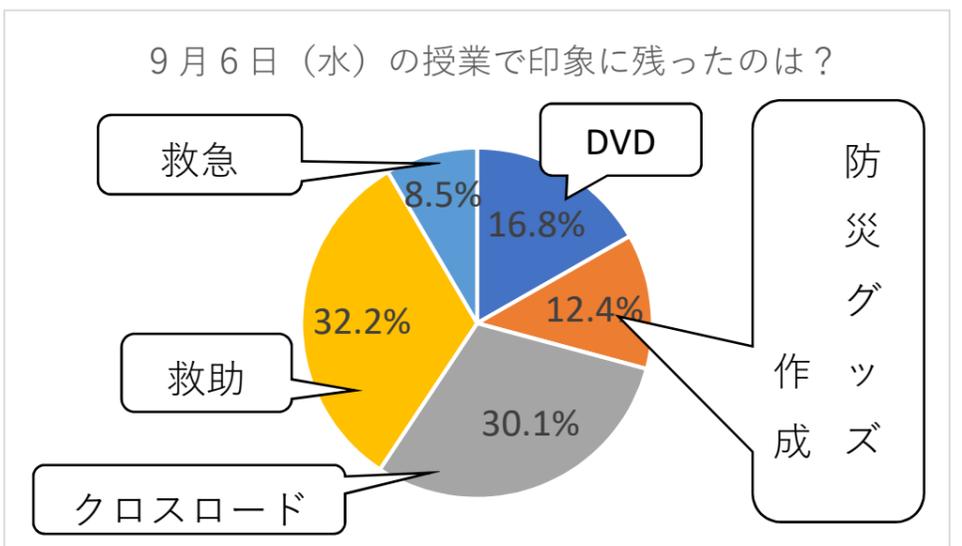
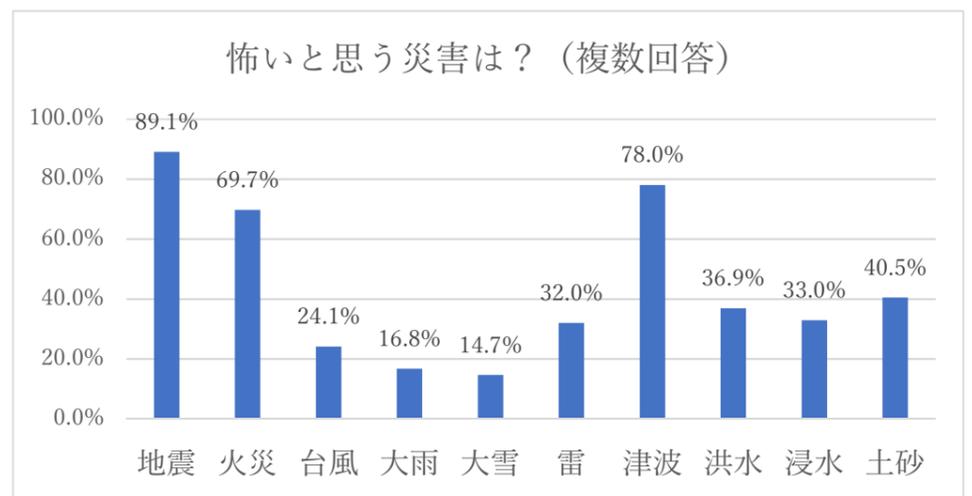
助け合いの精神が必要。

防災グッズ作成



身近なものと、アイデアひとつ！

3. 生徒アンケートより



4. 今後の課題

今回は体験学習を主として行い、消防署と連絡を取り合って実現をすることができた。当日が曇天のため、晴天時に考案していた「火災時の煙体験」「消火器訓練」「バケツリレー」ができなかったのが残念であり、令和7年度に、改めて挑戦したい。生徒たちの反応も良く、これまで、避難訓練のみや副読本での学習を主として行っていたが、実践的な防災学習の方が、より効果的に学習できるのではと思われる。「避難訓練・副読本・実践的」を複合した防災学習を今後考案していき、起こり得る災害を想定した上で、近隣学校、地域とも連携し、3年間を通したカリキュラムを編成していきたい。

地域と連携した防災教育の推進

実践のねらい

本校は生徒数が230名ほどの小規模校である。兵庫運河の南側に位置し、周辺も埋め立てられた土地であり、教室の窓の下には人工的な湾が広がっている。海拔は2.4mで地震による津波発生時は近くにあるノエビアスタジアムへ避難する必要がある。そのため普段から地域と連携した防災訓練が欠かせない。地震を想定した避難訓練では近隣の小学校とともに、ノエビアスタジアムへの避難に取り組んでいる。また、毎年1年生が「防災ジュニアチーム」を結成し、地域の兵庫消防署第6分団指導の下、防災学習に取り組んでいる。消防体験や心肺蘇生法講習などでは、「守られる立場」から「守る立場」への転換を念頭において防災教育を学んでいる。今後数十年の間に発生すると予測されている南海トラフ地震に向けて、防災意識を高め、行動力や判断力を身に付けさせるとともに、各家庭・地域へと防災意識を伝えていくことができるように、地域や関係団体とともに防災教育に継続的に取り組んでいる。

実践の内容

校内での取組

○火災避難訓練（全学年：4月）

吉田中学校の防災マニュアルに則って、火災を想定した避難訓練を行う。2、3年生は授業中という設定のもと教科担任と避難をして、非常時に備える。

○コンセンサスゲーム（1年：5月）

無人島で数日間生き延びるという設定で、どのアイテムを選び、どのように活用するかグループで話し合っ発表する。

例) 水が入ったペットボトル→水をろ過する容器として使用する。



○人と防災未来センター見学（1年：10月）

震災関連資料や追体験映像などによる、震災当時の状況や被災者のその後の人生、神戸市の復興への歴史などを学ぶ。

○震災を考える授業・全校集会（全学年：1月）

生徒会執行部主催による、阪神・淡路大震災の希望の灯り集会を行う。全校生徒による黙禱、学校長による講話、さらには震災当時の映像を全校生徒で観る。その後学年ごとに震災学習を実施。



- ・1年生は被災時の映像から、被災者の心情について考える。
- ・2年生は非常時持ち出し袋の中身を考える。
- ・3年生は検定方式で防災知識の確認をする。

○震災を考える朝の活動（3年生：1月）

3年生は1年次からNIE学習に取り組んでいる。その中で「令和6年能登半島地震」で被災した中学生の集団避難についての記事を取り扱う。



○灯籠作り（3年生：1月）

3年生の美術の授業で灯籠作りを実施する。美術部が完成した灯籠を使用して1.17の形で展示まで行う。

地域との取組

○防災ジュニアリーダー研修（1年：9月）

本校校庭及びプールにて、兵庫消防署第6分団の協力と指導の下、消防活動などの防災訓練を行う。ゆれるんでは阪神・淡路大震災当時の震度を生徒全員が体験する。

※消火器訓練・放水訓練・起震車(ゆれるん)体験
簡易担架作り体験・担架搬送訓練



○市民救命士講習（心肺蘇生法講習）（1年：11月）

兵庫消防団第6分団の方々の協力のもと、AEDを用いた心肺蘇生法実習を受講する。



○3校合同避難訓練（全学年：12月）

緊急速報に対する1次避難を速やかに行う。津波襲来を想定し、ノエビアスタジアムまで退避する。地域の和田岬小学校、浜山小学校と同時に避難し、避難経路や場所を確認する。本校では、生徒の中からけが人役を設定して避難訓練をする。



○クロスロードゲーム（1年生：1月）

兵庫区社会福祉協議会、浜山校区防災福祉コミュニティ、和田岬防災福祉コミュニティの協力の元、クロスロードゲームを使用して運河に囲まれた地域として水害や震災について考える。警戒レベル、分散避難、ローリングストックを用いて食料を備蓄することや被災地へのボランティア、震災当時の本校周辺の状況などについて学ぶ。また南海トラフ地震についての映像で、今後起こる災害に対しても備える重要性を知る。



実践の成果と課題

地域と連携した実体験を伴う防災学習を推進してきた。生徒たちが自らの命を守るだけでなく、けが人を助けることや心肺蘇生法、消火活動などで他者を守る活動ができたことは有意義であった。来年度以降も、継続的に防災学習に取り組み、被災時に繋がる活動になるようにしていきたい。

また、震災を考える防災学習では、阪神・淡路大震災や東日本大震災から学び、今後起こりうる南海トラフ地震を見据え、防災、減災についての理解を深めることができた。そして令和6年能登半島地震についても、教員による講話や新聞記事を使っ学習を通して、身近なこととして考えることができた。しかし、阪神・淡路大震災を直接経験していない生徒・教員の増加や、地域の大人たちも震災の記憶が薄れつつある中で、震災当時の様子を継承していくことが課題となっている。

過去・現在・未来をつなぐ防災教育

テーマについて

本校1年生（58回生）が生まれた年度は2010年度である。この年は東日本大震災が発生し、地震による被害のみならず津波による被害も甚大であった。また神戸に住む我々にとって1995年1月17日に阪神・淡路大震災は決して忘れることができないし、忘れてはいけない出来事である。

防災学習のテーマを「過去・現在・未来をつなぐ防災学習」と設定し、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震という「過去」の災害に学び、今も多くの方が被災状況にある能登半島地震の状況に対し、多くの情報を収集・分析・検討し「現在」を知る。そして、「未来」に高い確率で起こるであろう南海トラフ、東南海トラフ地震に対しての準備や発災時、発災後の対応を見据えたテーマとした。

ねらい

- ①阪神・淡路大震災や東日本大震災等（過去）から学び、教訓を得る。
- ②「知っている」「〇〇ができる」という知識・技能を身につけて、有事の際に行動の一步目を生み出す勇気を持った人材の育成。
- ③「未来」に高い確率で起こるであろう南海トラフ地震等に対しての準備や発災時、発災後の備えを考える。



過去

調べ学習

- ・阪神・淡路大震災、東日本大震災等の被害の状況、地震のメカニズム、避難所での生活、命の守り方、中学生にできること等をテーマにする。
- ・ICT 機器や図書資料を活用し、調べたり、プレゼンテーションソフトでまとめたりした。

校外学習

- ・「みなとのもり公園」「人と防災未来センター」で現地学習。
- ・フィールドワーク、資料や記録に触れることで知見を広げる。



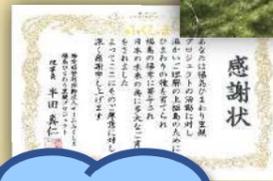
現在

ひまわりプロジェクト

- チームふくしまの「福島ひまわり里親プロジェクト」参加
- ・多角的な活動が見えないところで復興の手助けになることを知る。人の手助けはどんなところからでもできることを知る。
- ・福島第一原子力発電所の事故による風評被害の解消、実態を知る。

防災新聞作り

- ・防災に関する内容であれば、何を取り上げてよいとして、柔軟なアイデア、発想を立ち上げることを目標に、図書文献やICTを活用し、新聞形式でまとめた。



未来

プレゼンテーション実習

- ・プレゼンテーションソフトを活用し、他者に伝わりやすい言語の表現や視覚的な効果など、実践を含め試行錯誤し、ICT教育としての学びも兼ねる。

リモート交流学习

- ・徳島県 牟岐中学校の生徒とリモートで交流発表会。（次年度以降も継続予定）他地域の同年代の中学生とともに学習を継続していく。今回は「南海トラフについて」の学習内容交換会の予定。



学習成果と今後の課題

- 実際に活動することで、遠い場所においても復興の手助けができることを学び、一見関係のないようなことでもつながりを意識すれば、様々なことに関わることができることを実体験によって知ることができた。
- ひまわりを育てることで神戸と福島の距離をつないだ。東日本大震災の時に生まれた子供たちが、阪神・淡路大震災について調べ、過去と現在の時間をつないだ。リモート交流会で他地域の中学生と心をつないだ。
- 今後も2年次、3年次と継続し、過去・現在、そして未来へつながる防災学習を実施していく予定である。今後のテーマを「つなぐ」として、さらに広く、深く探究に取り組み、これからの時代を生きていく子供たちの力をどう伸ばしていくか考えることが課題であると考えている。

確かな防災知識を持った「工業高校生防災士」の育成

～阪神・淡路大震災の教訓から学ぶ工業高校における防災教育への取組～

都市防災の目的

阪神・淡路大震災の教訓を風化させず、次世代に伝承することは必要不可欠なことである。また、今後起こりうる災害に備え「防災・減災・縮災」に取り組む地域社会づくりのために、災害を科学的にとらえて危険を予測し、被害の拡大を防ぎ、早期復旧を図るためには工業の「技術・技能」が必要となる。

また、神戸市内の各地域や防災コミュニティにおける活動者の高齢化が問題視されている。そのなかで、防災やエンジニアの知識・視点を持った若い高校生防災士の育成は社会からも大変注目されている。そこで、高等学校で工業の専門学習を修得して、さらに防災知識を併せ持った「工業高校生防災士」を育成し、卒業後の進学先や就職先でそれらを発揮することで「地域の防災力向上」を目指すことを目的としている。さらに、工業の専門学習に加えて確かな防災力を身に付けることは高い倫理観を身に付けることにもつながる。それらを通じ、安全・安心・信頼できる高度なものづくりができる技術者の育成につなげることも目標としている。

実践の内容

- 防災士養成カリキュラムによる防災士養成講座の実施と防災士取得
- 専門家による防災特別講義
- 救急法・応急法講習
- 震災講演
- 市民救命士講習
- 災害シミュレーション演習
- 地域連携 避難訓練

◆専門家による防災特別講義◆

- ・兵庫県警災害対策課
- ・国土交通省
- ・神戸市建設局
- ・神戸地方気象台
- ・神戸住環境整備公社



〈神戸地方気象第台〉



〈国土交通省〉



〈神戸住環境整備公社〉



〈兵庫県警防災対策課〉

◆市民救命士講習◆

- ・心肺蘇生法

◆救急法・応急法講習◆

- ・場面对応シミュレーション
- ・応急法



〈心肺蘇生法の授業〉



〈応急法の授業〉

◆震災講演◆

1月17日には震災祈念講演を実施し、NPO法人兵庫県暮らしにやさしい防災・減災の芦田様にお越しいただき、阪神・淡路大震災当時の話を聞き、学ぶことができました。



〈講演会の様子〉

◆地域連携 避難訓練◆

地域連携避難訓練で葺合警察署主導のもと、障害福祉サービス事業所神戸イリスと共同で郊外での避難訓練に参加し、実際の被災を想定し、地域の方々と訓練することで災害に備えることの重要性を知ることができた。



〈地域連携 避難訓練〉

◆災害シミュレーション演習◆

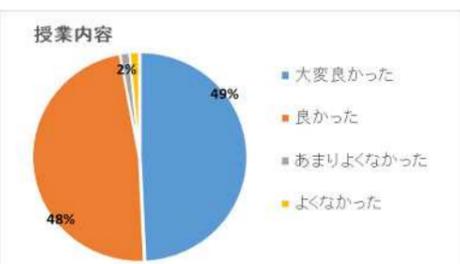
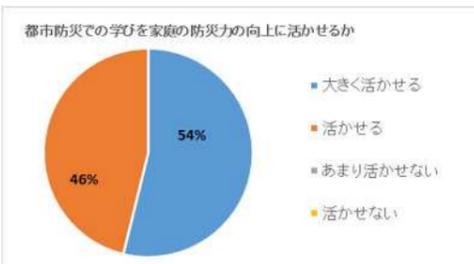
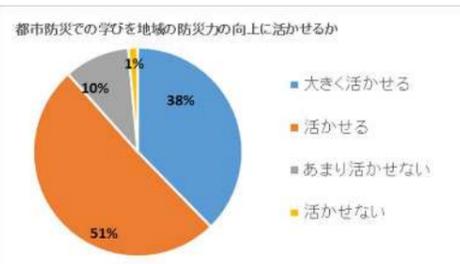
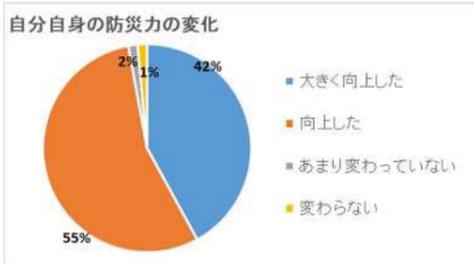
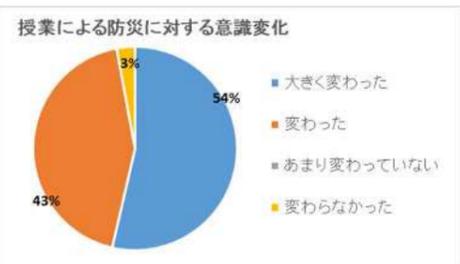
- まちの特性を知る
地形・道路・鉄道・橋・防災拠点・避難場所
- 被害想定を知る
地震動・建物の被害・津波予測など
- 災害時の対応を考える
安全な場所に避難・災害時要配慮者への対応

実践のねらい

- (1) 阪神・淡路大震災の教訓を活かした「確かな防災知識」の習得
- (2) 工業の専門知識と確かな防災力と高い倫理感を身に付けた防災リーダーの育成
- (3) 「防災士の取得」によるキャリア形成
- (4) 専門家の特別講義による幅広い防災知識の習得
- (5) 工業専門学科の「見方や考え方」を教科横断的に接続し、複雑に変化する社会や、あらゆる生活の場面で直面する様々な課題に、主体的かつ協働的に取り組む姿勢と力を伸ばし、地域の防災リーダーとしての人材育成

授業アンケート結果

学校設定科目「都市防災」受講者アンケート (令和6年1月実施)



成果と課題

例年、防災を学ぶ意欲をもち授業を選択した生徒でも、4月当初は身近な場所で災害が発生し、自分自身が被災する可能性があるというイメージを持つことができていない。しかし、授業や特別講義、演習を通じて災害を身近なものとしてとらえることで、災害や防災に対する意識が向上し、学んだことを地域で活かしたいという生徒が増加した。今年度 43 名の高校生防災士が誕生した(延べ 270 名)。資格取得をゴールとするのではなく、授業を通して培った知識・技術を防災士として家庭や地域社会で活かさなくては意味がない。今後、授業で培った知識・技術を工業高校で学んだ生徒として様々な場所で活かしてほしい。

今年度のアンケート結果からも分かるように、この取組を通じ、生徒の防災意識は大きく向上している。反面、自分たちの知識を活かすことに対して不安を持っている生徒がいることも確かである。

今後は、工業高校生防災士が活躍できる場を、地域や幼・小・中へと広げることができる活動を模索していきたい。それにより、活動する機会の中で防災士としての自覚を確かなものにしていくことを考える。工業の専門知識を持った高校生防災士が活動する姿は、幼・小・中の子供たちにとって目指すべき高校生像の一つとして映り、地域や企業にとっては明日の担い手として期待される人材とされることを期待する。それらの活動を通じて、様々な場所から防災や減災の輪が広がり、防災活動を通じて神戸のまちの防災力向上へとつながることができることを目指して科学技術高校は今後も工業高校生防災士の育成に取り組んでいきたい。

「たすけて」は繋がるための合言葉

実践のねらい

本校は、JR・私鉄の駅やバス停が徒歩圏にあるため人通りが多く、公共交通機関を利用して自力通学している生徒が大半である。トラブルが起こった時、危険に直面した時、手伝ってほしい時に「たすけて」と伝える力が必要となる。また、卒業後は社会に出て一人で行動する場面も増えるため、周囲の人にも「たすけて」と躊躇なく伝えられることは、自分の身を守る手段として非常に重要なことである。

災害を想定した訓練

3年間の防災教育計画とし学年ごとに内容を変え発展的に訓練する。

1年生は「たすけ合い体感ゲーム」を通して「たすけて」と他人に助けを求めることも解決手段の一つであることを学習する。2年生では避難所での生活を想定した「防災バッグづくり」に取り組む。3年生では体育館を避難所に見立てて、段ボールベッドにて就寝する避難所体験をする。災害を想定した実体験で実感した不便なことをグループワークにて意見交換することで、問題を全員で共有し解決に導く。

日常生活の指導

“自分から積極的に挨拶する”という行為は、心を開いてコミュニケーション力を向上させると同時に、相手の存在を意識することで視野が広がり、友好的な人間関係を構築する絶好の機会である。まずは教職員が見本となり生徒や教職員同士、あるいは来校者に対して積極的に挨拶をすることで、生徒がクラスや学年を越えて声をかけ合えるアットホームな雰囲気確立する。また、手指消毒などの生活習慣を指導することで、災害時に懸念される疫病から身を守り、健康を大切にする意識の向上に繋げる。さらに毎朝のランニングで基礎体力を備えたり、自分で身だしなみを整えたりできるよう、社会人基礎力と自立心の習得に取り組んでいる。

他の教科との関わり

生徒が課題を解決する力を身に付けるために、各教科に防災教育の視点を取り入れて、実生活に即した学習機会を設定する。例えば、情報教育では的確な情報収集の方法を学び、知りたい情報がどこにあるのかを知る。国語科や美術科では体験したことや思い出に残っていることを言葉や形にする経験を通して、自分の思いを相手に伝えることをねらいとする。このように、各教科との関わりを意識して「各教科で扱う教材の選択」や「実践につながる指導」が行えるように、教職員で3年間の防災教育学習指導計画を共通理解し、実践する。

3つの取り組み

成果 ・実際に段ボールベッドに寝てみることによって、「想像よりもかたい」あるいは「これでは眠れない」などの意見が出た。避難所生活をイメージできて防災意識の向上につながった。

・たすけ合い体感カードゲームを利用して、様々な「困った」を皆で共有して解決に導くことができた。

課題 ・社会生活の中での困りごとを知り、それをお互いに助け合うことで解決していく経験を増やす。

・教職員の間で防災教育の理解をより深め、共有し、年間を通して防災の視点をもった指導・支援に取り組む。

